No. 48
夫善吉の堤忘れ西さ言ふ上に優ろう
川
寤寐ろ里や忘れ
野上の里の古言吉を敢ふ
一二七枕草子
へ13
3145
6

# 青砥藤綱模稜案後集巻之二

東都　曲亭馬琴編述

## 二夫川の下本

大山ふ貨あり。人これを見て欲す。まうれども獲ずとのこと。貨ふ古物なるものハたまくこゝまを獲るとあり。と柱下のいん〻ん故あるうれ。さても蚕屋善吉ハ九月下旬ふ鎌倉へ来著し。ゆゑあて七郷の光景を観るふ。その熱鬧場間にまして。家をして富ざるなく。物をしてあざるな窓ふ倚て学を拍ば。鈎を用ひずして鮮魚をも釣べく。樓ふ登て酒を吸べ。ぶまず洗を投ざるふ。忽然として美女果るまの故ふ。少壮しく俳あるものハ。その銭を惜ひ易く。微賤して洗なるものも。富貴と難し。東家の子。家を奥せば。西家の子産を破る。田舎の鶩と為り。廣草の

ヘ13
3145
6
特

螢とするハ物ぐへ。去年の新店空舗と書し。前月の酒店餅師とあり。況て秋の鹿茸賣ハ春見し貝の花賣多く。夏の巷の冷水賣あり。冬の門邊に炭やと呼ぶ変化文彊なし。かゝる都會にてかくしも挊ぐが物のねしともありけん然りとも。不知案内の田舎児が本稼ある渡世を賣るべき主をもとめまほしとあふじ。と謀て思念を決めかねし所に。様を考へざるものハ武家の奴隷に系りかしに又ゆとりある坊賣ハ[illegible]とり唱て稚児より使ふゆゑ。彼れハ小廝よなんど称すれバ善吉ハ十有あまり。虔婆に導すまし。彼此へ来るといへども。凡庸の主なるものハ。孰かんじ[illegible]よりべ人を識るべき。賢を擇むに意なけれバ或ハ男儲の好みを論じ。或ハ言語の訛をも嫌ひて。事[illegible]のかぜよひずから[illegible]數十軒執謁といふとても。日を費せしが。路費既に[illegible]

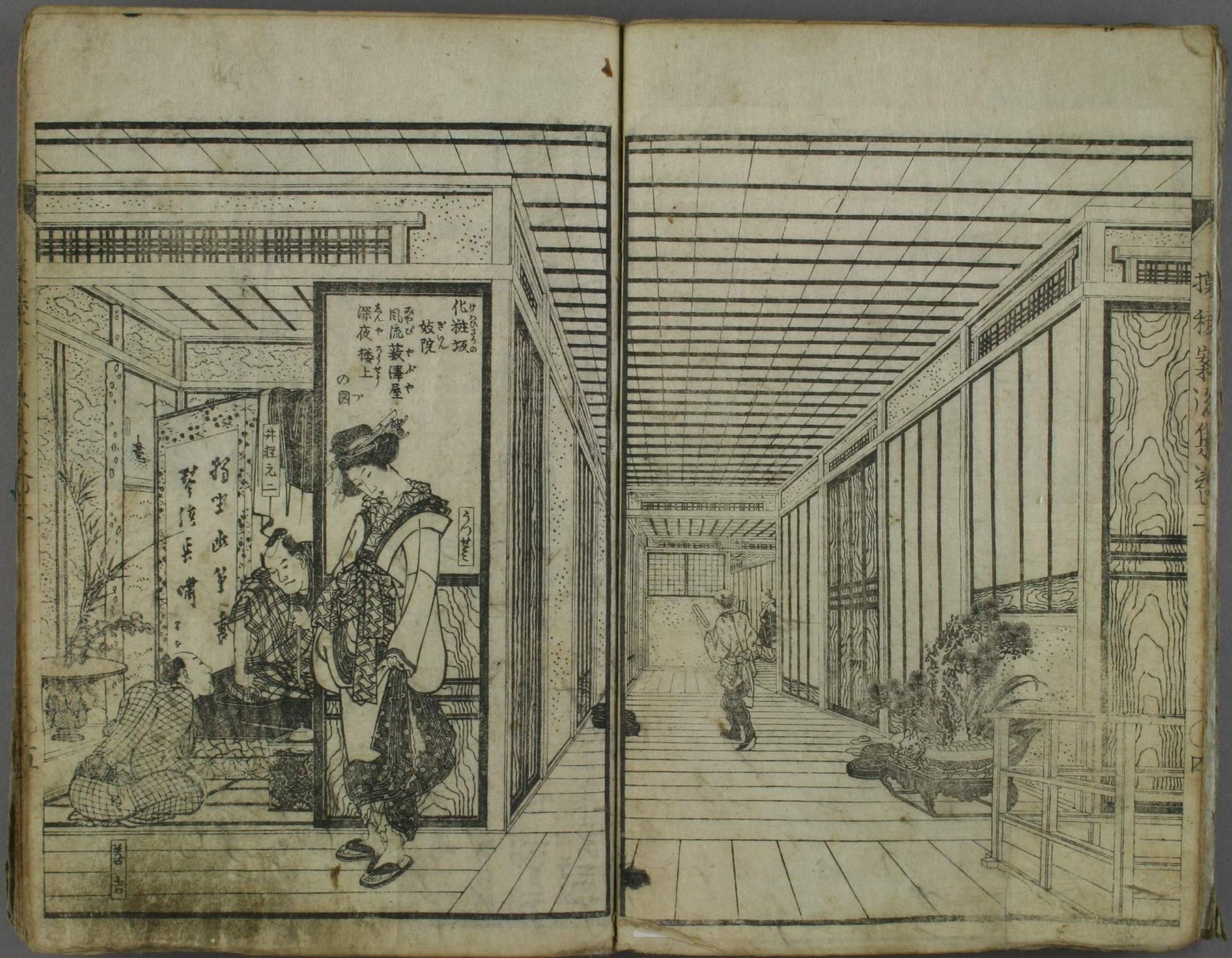
まつに一年も足を駐んと思ふべかりしが。宿願を果さじとて出で空しく故郷へ帰らば何の顔ありて姨女房の面をみるべきよしあらんと。百遍千遍思へども。せめひとつ五六七月又いくらずふる事を得ゑ。化粧坂なる娼女の長。風流藪澤屋と呼る大樓に。来着をとこ欲とて。繊頭ずしその人を求るよしを告るものありけり。善吉ハかくてふ圃ざるおもへれバ。今更撰ふいとまなく。それこそ究竟のところなれと歓びて。蝶妁とこまらへつ。件の長が家より來くに。縁とそありけめ。立地に事成て。彼の娼く。券書に保人をとり定め。次の月より使ますそ。毎日に米を舂とめそ宵の勤とせし。當時大磯化粧坂に。二箇所の妓院あり。右大将頼朝卿の花田代冠者をもて傾城局の別當に補しけるより。全盛今に比なし。そが中にも大磯の舞鶴。化粧坂の風流藪澤屋ハ。第一番の青樓なれバ。名妓もあまた敷

とるれく。嫖客ちぶ〜も終ること。まうれども善吉ハ。鄭聲艶曲乃
奏とも。ふんぬ〜ぶ。洞房花燭の樂とも羨ど。旦ゝう暮るゝとも。管ふ
米と春よ。一粒も化ふせど。そのゝと所老実るれべ。ちりわど主人ハ
盃多ゝう。見ゝて善吉ハ。米ゝの給銀と。過半近江へ贈ゝて。妻
女房の衣食ふ充。その餘まるとゝ主人ハ領て。節儉をゝく〜ふ勝れ。
拝堂の小廝ハ似ざるゝ。嗚呼ゝるゝのもあゝけりと。人金あざゝ笑ハ
ゝ。ゝくのあゝ〜ハ白眉の長と呼ゝて。ぬとも墓なゝ生活ハ。特ふ
富るゝのゝれ。米春夫ゝんゝ〜沢。常ハ人ゝるとゝもせざゝし。側のゝ
動ゝれ。彼善吉ハ陰言ふを聴て。ぬ〜ゝとゝ。ちゝ〜ゝ。
這奴ハ給銀大ゝう。故郷へ贈ゝて遣ゝとゝふの。然ゝ〜ゝ。
ゝ居ゝれハ領て。一銭も用ふゝ沢せざ。口とゝ〜ゝて。餅ふとも。

ゝ。些の物の減ざゝんや。頑ふ這奴ハ。年才ふ似げゝ老田猫ゝく。
表皮ゝう老実ゝる。ゝ〜ち。米を盗むゝ。ゝんゝ〜ゝ。試して
虚実を糾ふハ。ゝ〜。肚裏ハ思念一つ。有一日一個の養娘ハ分付て。
春屋の裡面を張〜。善吉ハ畳飼さゝ〜ふとてゝ。彼ハ春米の
中へ。星金一顆を入さ〜ゝ。ゝも。ゝ〜ふ〜て善吉ハ。その米を春ゝう。
千斛ハ作ふかゝるとゝ。ゝ〜ゝ。藤ふ雑ゝて金一星ゝ〜ゝ玉ゝう。ゝ〜
ゝとも。ゝん福ハ。且驚ゝて且怪ゝ。藤て母屋へゝて。如此〜ゝ。
金を主人へ返せ〜ゝ。白眉の長ゝの為体ふ感佩して。日来の疑ゝ一時
ゝ〜ゝ。人を謀ふけりとて。今さゝ悔〜ゝ。昭向ゝ〜ゝ。
金をハ返ゝ〜ゝ。ゝ〜ゝ。ハ如ふふゝて正直ゝるゝのこゝ〜
米ハ勿論ゝ米ゝ。金ハ。金ハ。天ゝう汝ハ賜ふ。

ゆえ彼方といひ渝せば苦吉咲て頭を掉り其の金のことは云ぬ
干て僕主を取るべき理なし。はらく牙のわらくを慮りゆえ僕主ふ
まうて下いまざつくだくの事を積ど主の為よ牙を刻とた義を竭と
よりもうえよ天何者の徳を賞てこの金を賜ふべき米の中ふ金あれ
ば紙はこせあつねりのあるべ必外ふ主あるんさえぐを乱しめくり。彼
米を賣るべ何処の商賈ふゆらんだでの米を生しる田舎までも使
うけあつてゆえゆゑ中とつふよ長ふ感涙を禁あへぎかまでまこ
ものとはこで側のものどもの讒を実と漫ふ疑ひ人のあるを
養娘してこの金を米の中へ入さしたりとて縁由を説はしこそいふ
ゆう。凡色里ふ生活をるものの及ばれが奴僕とあるものの保落ふ
理義をはこで。難佞ふして実情ふ。仁義礼智忠信孝悌の八行を

亡ふふあつざれば。てあて富をあ欲ふ至ぐべつまも又慾ふこれらのはを
はる紙ゆてよる業とふはつまど親ようう受る活業あれがはろなる
とそるも已ざ家を抱きて臭たを忘まて漫ふ和主を疑ひ孤るふも
るはあまりのり。係ぶいと正しるるらいぶせくもあるんはるふあれど郷ふ
入てふ郷ふ従ふ伝るるも過世ふ。脱まるぬ道あれがてそ。一季半季の
主従もうと後の名ふ削ふまざつまはろふすーあれが年をかさ移をくよく
つくよふまふふ和主よはふはるぞとそ件の金を与ーふ善吉ふ縁由を咲そふ
さまざふ固辞ばかりて。おそるく受納めやどりのるふようそ。もん疑ふあ
散るふ自の幸とのをそひゆよ金さふあるふ當りかさえとふこそかふ
所の給限を衣類の料ふせざそといくども。なでめよふ聽ふんて空俵を
悉所得ふせよとて賜ふとりて。これをあつめて借とれふ月ふ四五百乃


化粧坂の妓院
風流藪澤屋
深夜樓上の図
井垣元二
うらさと
撰秘案法集巻之二

銭に獲易し。もれば別に何をか求ん。僕宿願ある紙めて妻子を忘れ
留つ。ちよ糸りて使へるに。圓様この情由をそんでの尾を物がさう。
さて毎月に。佳ところの俵の價を反古の裏へ書つけさる紙。とう出つ
ん。せーくば。白眉の長ちく甘ーちまようろづよてろーて若竹が
眷米の多少を竊に計へるに。眷滅といふのみく。嵐に食まとといふ
るのみ」去年の春ちで米を眷せー。某甲をとこふ比ぶまが損益ちくの
事にあらば。名に彼に主の為に。ようろきのうまがとて。俄頃に飯げて。
庖厨を働さるに酒食の数をんでめに出して客に多く勧まども。心を
用ひて費を省けば。物として損ることなく。客と妓女に飲ばのこるらば。
主人の為に益多けまば。白眉の長ちく嘆賞ー。次の春とう樓上のことを
主せーくば善吉が所得ちく多くありふけまど。漫にんでめの志を

稼て。賤妓のひとり買さるとも。いよ倹約を肯とする物ぞ。ものが
心をのて人を推さば。妓女ちが失あるとなれば。心のびく。ふつまを
諫めて。鴇子ぶどもゆさるとなく。又ーつる嫖客が。溺まて帰る紙
応ーとなるに。ふ托して久ーく留めば。彼とうく此とみく。減をのて進止ー
くば。妓女ちも善吉紙いと憑ーれのふひてようろを客あようく
薦めて。物をくるも多くるこの金とも善吉が悉皆長に領て。一点
だにも匿さと紙せざ。かくてその年の終に。ふくいと寒れ夜
空蟬といふ妓女が客に二階堂家の若黨に井軽元二と呼るうのに。
えーじめての人系のれど。寇家に熟しるおりーちて。酒を突ことと
大蛇のごく。物を喫ふと胡孫に似く。こづくく歌ひこづくく舞
いくく酔て臥房に入りぬ。空蟬に彼がるあげる紙情

とろへバ酔臥をミんて竊に跟び聴て臥房を脱出てぬよび寄も
はかざりけり。さる程に更闌て丑三にやとおぼしき比え二ハ酒の酔
醒て蛇の如く長くすり亀のごとくうんかつるにつまのこ裳脱の殻に
寐さして空蝉の君ハそぶん忘まて枕方に置されたる鼻紙乃袋
に八金五両納てありけと幺かとすくて遽しく身を起し撈とりて
内をミんるに紙のミありて金ハなし。さふねぶに腹たゝしれよ金さへ盗まを
たりと思ふにも志かも見る塩ぜ声をふり立この楼上に偸児ありつが
ちやく返さぜん目にものみせんと脛を露そいと罵しく叫しけバ
空蝉ハ恐て驚されて忙しく走り来つ。とうんまへえ二が居長ちく眼を
瞋り臂を張り勢ひ烈火のごとくあるにおそれて近くへ寄も得ざりけるが
身を潜して走り去善吉にかくと告るにおもよく彼をとこ不寐いだして

ありしかバ縁由をとんや咄て騒ざる氣色もなく。空蝉が臥房に来りて
ひたり罵るえ二を宥め。ねよび縁由を問にえ二ハ敵に得たりと折から。今
善吉が勧解をきんて勢ひに十倍し。金を盗まさるよし幾くり返して
説たつ〻し世ま枕さがしとかいふ賊あるの隙より咄つけまを熟く酔臥さし。
爾の外へ脱出たらん疑ひハ彼妓女にありがし速まつが金を返さだハこの屋墓に
茆蒼を生して秋ハ虫の音を咄くんもいと易きことくと覚祝せよとの兄
ますれバ善吉咄て小膝をすゝめ。さればとよいて酔臥なしゝバ。志かバ
所もありすん先ひあひし金の数ハいくだかりにやと問せりゆゞ眼を
瞪らし金ハ正しく五両ふところ紙に推包こそ志の鼻紙の袋に納し〻れ
置るに金のミなれハいかにぞや。つまハ只一年の在藩会すれバ女ツ子ー
と祇飲バすそ殿より賜る俸禄をかけこても夜猿を穀して一夜妻を求る

うれよりや碎て熟睡もとともその怪女とて東の間も臥房を離ふ
ぬるよあぶぬ汝よりうんいさ益こ速ふ長を出せ長を出せといそぐもの
ゆやくとうち笑ひその金のるるくべ多く労しのふよるべぎ僕暴ア
盃盞をとり収んとまうるれこの屏風の外面ふ紙ふ捻アて捨しるるの
あり。やいとりて開きうんるふ金るり。これ刀称ぶ碎ふ紙まて踐しるひ
おるうんとこくべさそぶうちもうれどいく度ろいび学んせども碎しる
人の癖うれべ慈ざふえるはど。醒のふを待て返をとも。逐ふよあらじと
そぶおくふ僕こまを頒りね。常ふ百金二百金齎しるふ刀稱はわれども。
故るく失ひるふこと及ばぬど。妓院ハ特よ門戸厳ふ。さる不正るあべしや。
物ふハこひ悵と考りり。おづ僕を竊ふ居て。如此くと告るで。小夜
深しるふ云るく。人の睡を覚えるまでふ。罵アるふハ倘痛しく鎖りて

ちハせよ。彼金りて来て進ぶもんふ。といひりけて。遠しく退歩よけまべ。
井輕え二ハこひの外ふ貴士吾ふ窘られ。直と呆きていふよりもるく。枕の
塵を捻りてさりさる程よ貴吾ハ。ゆくびえ二ぶ臥房へ来て。彼がいひ
つる数のごく。圓金五両を遞与ふけまべえ二ハ俄頃よ笑ひさまけく。
件の金を受納め。ゆよ某の男ハふべき程のとるるねよ。甲夜の酒ぶ醒ぜて。
声さへ不覚ふ高うるりしを。金のるのとのこるかりひそ。彼君ぶ強面てひとう
森さしたる腹さしさふ。と改を掻ついふよ空蟬さ今夫ふ新穫てるるは
外面ふ立在を貴吾ハんりてり。徹と立るるら備よ拒紀。今暁の事
みれもんず。ふひとりとりとあべさびや。彼金り失さんあべとりづ
りるべさふ。勉といふと忘まるふるふ。と真実ゆふいひ諭せべ。空蟬ハ身の程よ
いひそくべさ言禁もるく。術ようくもちさりし。今暁の首尾をうるるよひ

咲え。やがて屏風を推ひらきつく臥房ふ入り。たゞあの丈夫ばかりどうち解て。俗ものるたさるふりてるせば。えニさ亦を追ふ。ふ。駿馬を攫ーふ。甲夜まへ
ひとり待ふびて。うちぞ對ひ。ゆ燈の丁子ばもつゞ焉ふ。結びふけりとゝむ
ゆ。養の往交娯ーくも。雲とるり又兩とる。雪の夜まふむ窓の隙あくゝ
ともるゝ曉方のぱまるれ鐘ふ鶯ざれ。起つれんとする程ふ。今朝ハ殊更ふ寒
けまびとて。空憚ハ枕方ゆる。盃をめんとりて。一度さじのへといふ。銚子イ
酒ハありるゆゞらぬゝ冷ゝる紙いふせんまゝ。燈るたゞりゆる。湿火ハゆる
ありもやまるといふまえニハ臂近ゆる。醜女火鉢をうつ。箸を取りて
二ッ三ッ。滅殘る火を搔起せば。忽ち紙焦臭くゆりて。弗ゝと煙ざつを。ゆゞ
とて夾ミ生ー。押りるゆゞゝまをんまを金ゆり。紙二闇ふ畏ゝるその数
ゆるもゆあり。えニゝまをとをんやうんて呆ゝて半晌たゞりゝまゞく

頭を搔ゆゞら。空蟬をんゆりてゝまをんゆゝ。七遍索て後ふこそ。人を疑ふと
いふ世の常言をゆりまをひあゝゝれ。正ふこまをまの金ゆりが失ひりのゆる
なゝ。ぱゝらゝ事を案ずるふ。甲夜まへいゝて酔ふ紛まて。獨酌む酒を
老ひ紙入の袋をば。疲るたゞりに濡ゝうゝされども生碎本性消ゆゞ彼
紙入を乾んとゝく。火鉢の上ふ翳を隨ふ。裡ゆる金を庆の中へ。ゝゞしゝるを
一点ゆゝゝゞ人を疑ひ剩彼をとこを虚ゝうゝまへ人ゝゆれ形ゆゝそけゝと
只管ふ慚愧ゝゝ。忙ゝく吾古紙屋そいふ。曝まへいゝて破ゝる有ふ。
紙入の中ゆる金紙。火鉢の庆へ埋ゝゝうゝ。ともゆゝゝゞゝて罵ゝしゝ。ゆゞゝ
鈍ゝゝて今ゝ亦いゝんハ面ぶせるれどゝゆゝで已べき事ふゆゞゝゝるゝ
和主が屏風のゆとゝまを拾ひゝとて返せゝハ別ふ主ある金ゆゞ明白ふ
祝ゆゝゝせよ。祝ゆゝゝせゝと信ゞゝてゝゝゞ義吉宮ふと笑ゝ寓ふ如く彼金ハ

僕屏風の内そうふて。拾ひ上げゆいど。齋一郎ひ金五両失さうとて驚
ろふをさらやあらぬ。尽さうとも。樓上あてのるるれば疑ひの散べをよわ
ぬ。あらも昨夜ハ僕ぐ不寝の番してゆふやくまでふ正るをとを。釈方ふ
在ぐひもるたるぐふこそ。五両の金ハ貴けれども。世の悪説を受んあらん
ぐ。この樓上ハ賊ありて。客人さらの齋一郎ふ金失さうとつはてる
生活をそうう衰へるん。所詮如此くといひてら。金を返一進ぐとて彩ふ
ふ次りのあじとゝひ一らべ。ふの是ぐ金を進ぐしてう。あるるん今ゆくるく。
舊の金の生ぐる有ふ。刀称の疑ひ去次く散て。欺一こそゆと首尾を説
あるせべ空蟬ふ生ぐやく曉て。若者が物を惜で。後の後ぐそ主をあひ
滅ぐを感佩一。元ハ背ふ汗を流して。数回嘆息一。孤一や。僅るる人を一
愛惜一て。ぐの底をんぐれうう。泥の中ふ美蓉級生ぐ。砂の中ふ玉を生ぐ。

妓院ふも又君子あり。志の愛ぐ。金残アるの一和主ふとぐせん。ぐ納ふ。
といひらふて。前の又両と戻の中ふ。今ぐ出ぐる金を合して。若者ふ与ふ。
左右の一ふ是を受ふ納めぐ。前ふ進ぐセーハ。ぐのるんが返一ぐ。
仔細ゆハ祝ど。別ふ五両を加ふハ糞ハ一ふ。あぐ。と固辞を許ぐど
小勝をぐふ。和主是を恨ぐハ。快く受ぐ。ぐもせでハ是を再び。
妓院へ面を出一ぐ。失ぐうとぐ。ぐこそ。ぐふあぐねる級もハ。滅ある人の
為ふ。ぐどりの金惜んや。と叮嚀ふ説諭せべ。空蟬ふ側ぐう。ふろ共ふ
ぐもるふぐ。若者辞ぐるに。御ふ一て。やくふ納めぐ。現や。堪忍五両の
金ふ合して。獲ぐる思案十両主をぐ。ハ牙の為ふ福ふいと変ぐる。若者が
陰徳ハ。ぐこの一條のこふ。いと憑一ぐりのるふハ主の向屑ふ。謙ぐ
ぐふるふあぐ。ぐ祝ど。就中件のふ級偽ぐて。ぐ感嘆一。ぐんべぐて彼

をとこ斯夜更闌てけ゛臥房の外面より来て遽しく呼覚し。火急の要用
いで来たり。金五両貸てたべといひけれ。[illegible]かくいふ身のうらびげ
貸金ありへあらば彼が物を彼がえふ。推辞べくもあらざれバ。[illegible]金を
遅与せしが原来るゆゑ主の為ふなせし陰徳陽報ありけるにや。これもおさ。
些の報ひをこそべしといひしがそれとは知らでおしく[illegible]物をもちてする
身かりさる程よ光陰箭の如く。又梭の如く。善吉は假初よまいの処へ
来つるよりはや八年を経たりしが。三季の給銀ハさらに臨時所得の
金銭蘊て百金ふあまりぬべし。宿願既ふ成就するにいやまでかくて
あるべきよふ久しく父母の墓へ詣でず。姨女房がいかふくと待わびてあらん
ぞかしとさひ出りて。あつ汝ふ旧里の空なつかしくて。善くは主人の気色を
窺ひ。近ほどのる吾も暇をとらふ。長ふ家の白[illegible]ある状

今は忽地よかへし遣るも。いと惜くおもへども。進退を主の随ふまかせ。
庭子といふものふあらざれバ。かへてとどめ得るぞ。いで息子[illegible]して。
何日を限りと定めもなで今茲も秋のすゑふなりて善吉は起行の准備を
しけれども。いまだ主人の許を獲ざれバ。いかふくとおもひ煩て在しが
やゝ九月十日ふなりぬ。この年来物積りて見よ金百二十両あり。これを
主人より受取りて。やがて別を告る程ふ。この楼上より名さる妓女ら餞別ふ
とて物をとらせ。主人も路費を助んとて別ふ金十両を与ければ。此彼合して
百五十金ふあまれり。物影懐ふせし。独行は殊更よ危しとて。そのうち
金をバ藁苞ふして背ふ負ひ。なべて身がろく打扮て主人が年来の恩
恵を謝び。ゆえ頻ふ臉を押拭へバ。白眉の長嘆息しつれ年来いかゞの
小廝ふを使ふといへども。いまだ汝がごとくなる者を見ず。後々ハ暖簾をわけして

さつまて生活さもんどと縁よりそひしが兵衛より眼をそへばそひ
のこまていひびひなしよりや田舎八月暮ふ紅易えとありとも之意の地も
あらば妻子をかるてゆくさびまよ再會を俟のこといくば音信を撰初ふ
物一ツ齎しなることもなくて百五十金のねしよりるる。皆是主の蔭なれば。
縦故々へうりても東のかく衆足ふて夜も睦ゝんとかるひゆかどもふ
どく宿願ゆゑ。といひひけて又国を拭へば白眉ふ次く嗟嘆つ路次の
用心叮嚀ふ教諭して目送りけり。時ふ弘安四年秋九月十一日。善吉八
遠ゝく。花街の大門を走り出近江路を投てゆく。百里ふあまる旅なれど。
今幾日ありて京々へ帰ると却へ思のづから。歩の運びもいと疾き草鞋
汚さぬ秋日和。五年前よ近江る。家をいでゝも九月の十日あまりの三
なり。尾上の黄菜野邊の花。人丸とばかりぬ名のみ又つ時ふ。

故郷へ飾る錦りと未憑ゝ紀矛の覚ふ。ろ形く結ぶ朝露を玉と
ゝんつゆく程よ。その日かんゆく宿を投め。次の日八相模河を東北へ
遡洄りて甲斐ふ峯ふつけ入りつ。三宿ふて伝濃ある下の諏訪ふて来よ
けり。ゆくさ紀もこれ山路なれどまつろう近江へ順路なれば。険阻を拓とも
せ涙又いくたくの路を走りて寝寝の里をまりる日。雲ところ鳴るるの
なのゝ。凄ゝ紀荒男二人海松のごとくかれ垂さる。裾みゝるある森衣丁。
荒索を帯ゆて一個ゝ馬の履と。二三十の綫を擬ふ夾ふ一個ゝ食
あませゝ園子の笛を頭髪ふ挿ゝるゝ。一里塚の海ところ。ゆ紀とも
走り出て前後ふ引夾ふ駅方ふ雪まゝ。ありゝけふ朝うら青
蝿追ふて鐵鈔三文の駄賃ゆ得ゝとゝ。備買とゝくゝ。ゆ見と
いひつ紀李ふ手を撫ゝび善吉吐嗟とうち強ゝ。家久をんせゝ

建久二年
奉供養六十六
七月十四日
岐岨路ふ
善吉
危難ま
善吉

うち笑ひ。さいい嗚呼するものどもう狂。中山道を跨ふみて。車中去
いく度か往還するの紙。備買とて彼のくれせんさく退ぞきと回答の
あんぢを右と左へ撒放せば。倭僧もせば冷笑ひ。あ狂苛刺刀稲荷
雲水の旅客よ。肩を貸祝べ世いつてふまぢ。多寡のきれるこの驛場
酒價欲さふを半て親ふも打まね尾を打るたちに撞きたり。
と一個ぐいべ又一個おみじ処へ生寒り。否のぶべ否といいのぢ。叱る科へ
せぢ。物うぢいべ月が暮々。その彩麥遮せとを撒る右紙拂へば左
より。腕捉て動せぢ。さいい狼藉のうん人やあるこの偷賊を捕てきぢと。
嗅べど叫べど里遠き。緑の林風さらぐ。谷の石滝と谺のこいいぢうに
寝ーて後よ腹ゑ踏のるのけまべ彼首へ黄縁う。巳首へ携り。撃まろ
撃つ一生懸命。一個の彩麥ふ両個の敵ふ。爭ひ難ーみてよろう。

いとも危くうんえとる折。三十餘家の旅客ぐ。被包背負つ。拷の脚絆
の柿紅紫。淡塗の笠物ぐ。て。田尻のやうう来るありけり。そうまべ
目今三百ぐ。悪棍ホふ劫され。物奪べきまえ糸のれべ。ちべーも得堪ぢ
笠撥投り。ちう懸うて浸るを。引被さて筋斗をうと。松の株へ投著
まべ。ちうたうつる又一個ぐ。眉間を襲と撃るやまー。怯む所を足を抱ーて。
芽萱の中へ撞と滅ーー。小賊ども苦痛をちうや。泰平の世よ憚べ。
独彩と倫りて白骨よ引剥せば。可情首を失べ。さでも命ぐ惜うべい。
ちう身を起ーてつまこを撃。つぐ彩麥欲うべや。と罵つ。蹂躙まべ。
悪棍ちいいぐひるくて。ぢをざも撞るぢ。阿親方。三日酒ぢ。欲ぢも
あれ。二ぢ命をとそのぐ。引剥ーて彩のうせん。けいい朝よう酒價う
るとうべ。備買とてたべとらひーふこの旅客ぐ情ぢ。扱搗ちんとぐ

腹たゝしさふ。ちからぶと拳を抗するのゝ詳しのへと臥ぐら。勸解まゝば
旅客冷笑ひ。やゝ暫くして題さゝやゝ。そなるをとこつれ伴侶多。
ようや何ともいづくしく強て駄賃をとゝんとて。旅客は狼藉せば閑ア
守あり村ふ長あり。この道中ゆて一ヶ月も。生活ひるべうぶ。放しがさ
奴るれども。秋の日の經易よ。ゆろいそぜせゝるれば。汝ホが首ぶ見て
徑ー得さゝるぞいざあのくとて言葉をんうつく注目されば言葉の
たゝや曉うてえ来駅ーえあのゝちしよれ程よ意ーう。衣の塵土を打
拂ひ。行李を負て楚と肩ひ。旅客とうちつれぐちて。菓原のかゝ走
去まゝば。悪棍等ハ直と糸まゝて。陸おどひーて暗まー亀が頸を伸ちふ
異なるぞ。起ーうつて目送うしうう。かくて言葉へかくと十町あるふて。
まゝべく旅方をんかるふ。彼悪棍ホハ跟ても来ぶ。おゝ旅ゝんぶ。

安堵ーうべ。旅客ようち對ひて。恭ーく小便を打め。某不意よ。悪
棍等ふ劫され。故郷の横道ゝ。ゝ。危うしけふ異なく
救ひるうるぞよ旅ゝび言葉よ渇ーかゝ。旅ゝて来る使ゝもあれば。
ゝあて且ー供べうゝふ。うちはゝゝてハ死ぐゝ。うち捨て
走りあゝといハせもあゝぶ冷笑ひいれさのゝ病ゝのふゝ。ゝ独ゝ
るべー。某ハ下京ゝて。些の買賣をるのうゝ。義濃信濃へ亡親
どもの故ゝるれば親族も多うゝ。ゝまゝ紙使ゝて年ゝふ下向ー京ゝ
抱と彼処へ賣ゝ。彼処の物ゝべ京へのゝりて。をゝく生活の助ー
をゝゝべ。故郷ハ年来熟験ゝ。ゝん家ゝ懐ふ物ゝゝ。ゝゝ
ゝるゝみけゝどゝまゝ些の本業ゝ。ゝれゝゝふゝ伴侶ゝゝ
ゝゝふ路をゝゝべ。野伏山賊ゝゝ。ゝゝゝん家ゝ植ゝゝ。

おん身は吾倘が案山子ふるうて。路次の妨をうるべし。抑おん身は何処へとそ。はるの処へとそ。旅は道づれ世は情。むしのくもいひよおんだや。

ふくまるの〜相潭のもの〜京よりこるうるべ宿所へ送り進ぜん。

といふいと懇切ふは。ゆゑ有まじ。どこれとそも忘放られど。侵るの〜そよりの物うら。曩ふ赦まーる恩あれば。強面いふへも為せざるんてうるべ。蒙芭一個を以零にして。物齎ーたる旅なるう。祢べ。爭おん身を厭ふべ。

某は近江のものし。家は究めて貧くて。妻子を養ひうるはくまるに近来鎌倉へ越えしまど。幸浅なるけまど物も為るべ。いとぶらよ。家へ帰るべ。まふ。ーは伴侶もあり。甲斐が峯ふて足を傷り。彼を一千日後まーれど。遠うふだこ追著るんぞそるはどは伴つる紙絶ていぶ。せーらふまあ。と実語虚言うち雑ていべ。旅容うち点ぜ。吾倘も

いそぐ旅なるぬふ。預ふこ稀なる伴侶とるうる。曩ふ悪棍ふまかんぐらひて。さそそ疲労るひけ。今宵はん宿るべーといるるた狗ーくて。あふぶもがとふ。どもいふふも為るくて。野尻の驛ふ宿を投め。彼ばが宗なる人と呼び。ーは近江の人と呼まて。枕をるべく卧なまども。只顧ふこ。ふれて通宵いも祢ればぱ〜とちひまぶ。

まのをとこぶ面魂眼ざーも平なるぶ。脣薄た物のいひざま。絶く華潔人ま似ぶ。且その為体。坊賈ふ似ぶ。まの世ふいふ匂ーう濃ぶ。

庶ふやあ〜んぶ〜ん。ふ〜ぶ前の雲ふ水ふ。ぶ〜ぶ悪棍ふ。

ーまま物ある処よく〜ふて。此彼窺ま謀ー合ー。途ま危難を凝ふ。

各ーて恩を被せそーまま誘ーう輙く金を奪ひそ〜んと計ぶる

りのるべ。前門ま虎を防ぶ。後門ま進む狼あり。と世の常言も

ワヅラウ。オヤイ。オヤイ。ト脱んとて。さるゆかうさるゆかうとゝ。絶えべき計策なく。いとゞふ夜をあし。次の日も又の移りもふゆく程よ。彼が便とる隙を窺ひ。辛して二里あまり。喘く走り。汗握拭ふ眼上の瘤の潰ることゝ。てんでんあて吻と胸を拊ゆくまぶ遠離まで。彼もの足だやありつゝ。けふ追著こあじとろひつ。彩面をうまべいつゝ程ふ伴のもとこ茶店よ尻をかけて。ゆう。義吉をこんを。呵くとうち笑ひ。ちくさー振れ。ふのワ移をさん来ませーう。あん牙ふ紛まで。彼此と二三遍索さう。誘ふ移ふもふゆくべ。といふ否といらくゝ移て。息ふとらる。ふ抱しつ。ふ祈佛を祈念して。その夜を大井の津ふ宿とう。その次の日ハ鶏派る。客店よきをあ世ぶ。ふてて一更も目睡ぜ。てう舊里二夫川へハ。二月ふ入ふ日ふ足ぶ。あり。ね。近江路へ程近けまば。彼が思念ふ

あらぬ。動ふ。ふまで。隙を窺ひ。ふを下さんとふるゆまべくるゆど。幸ふて道ふぐら。往還の人跡絶ぜどさしぐふ新渡てやけふまでハ幸ふるゆ。ワがゆくゆ。ふ彼ふの村と。明白ふ告移ぐも。近江路へ入ふん日ふ彼ふを空くして。ふ止べ九義濃の垂井ろ東ふ。熱坂が松とそあり。ふ。ふりハ八九里もあるんどらん。昔も今も國ふ盗家ふ鼠と喩ふ洩ぶ。ワヅ運命の窮る所ふ。ふら歎ふもあるあり。憑むふ親の神霊氷煌ふ賀の天祥夜のあるゆ日の護りふ。まりゆひて若者ふ。今の危難を脱ふ。ふと。ふ管ふ命ぐつ。樹ふとして楽ぶ。又伴まそ。あく程ふ神信を獲りてやふの月も逆ふ差るくて。天流の野上ふて。日の暮ふべふ宿を投けり。この如ふ方々へ。僅ふ四里ふ足ぶるりね。

今須柏原より西へ。紀已もあるべし。賊を禦ふ便あるべし。彼れ
かくても居がたし。今青唯一宿るべし。野上乃
花子ゆゑ。ど呼えらる。傀儡婦もありけん。今へ不便の村あるべし。
さる程女わかざめんどよりや飯盛る女の子ども。相彈て夜を
共にせべ。おのづから仇を禦ぐ。ひぶ柴山子ともるべ。おづ相彈て
ゑだ中とひて。その客店の下女どもふ意を著てゑふ年紀十
八九可る女の子。容止も醜くでいと怪悩あるべけり。ことをあそと
いふ。おまるものふ似さう。彼も又ゑんとゑとおべくあて信ずふ
歎ぜべいよこころるがくて。言の叙あるんふ閑やとふ程よ伴侶
ある癖者ふ添せんとて。帯解うひて居室ふ入りぬ。もあれ彼女の子。
善吉ゆるふ来て。灯燈ふ油を佛加。やがて立んとする。蓑を善吉

急ふ引とめ。言忽率ふ似さんもいけん。おん身ふ
おまるる人の如し。今青五倫ふ大難あり。救ひあらんやといふ。良
久くとんうて。おの宣へ。ふわも又おん身をんさる人と。
ふ。五年前の秋。岐迴の妻龍ある。ゆゑ宿ふ。一夜あひ。
善吉ねとせんふ侍らどや。現その夜さう宿かりしゑ。二夫
川の善吉ある。原来おん身ふ彼客店の少女子阿六刀祢ある。
こふて再び会んとふ。ゆゑふも。おぶ。ゑれもゑべ。ゑれいくとだうふ。
ゑ程疑ひ敬ざう。当下言吉膝組の程。曩ふ。おん身が
孝行を感佩して今ふ忘ゑど。此度故郷へ帰るとそ。おるど岐迴を
過るゑんが立うて防げや。とゑ。ゑべざるふ祢ども。といひけく
後方をえうう。ゆゑび声を低し。寤寐の里のとうさう。怪死

野上の宿
才女善吉を
教ふ
善吉

をとこふ伴ま一歩の間も由断せず。彼が毒計を脱んとゐくべきころ
易くゝぞ只いづくよ妻籠をあれるそれがあん身がそよねまさん
とゐ絶てゐふ涙茫くゐいくふるりあひ。いつの比ようゐの知ふ伝へ
ものふと叮嚀よ問まそ急ぜ酸鼻親ふそ伝へし和久郎ハその年の暮
冬ゐくり伝へ。荒まそる宿よゐり村の雨ハ袋ふ降そげどみの
幅陝き女子のゆひるさ人ゆ之ゑ送葬過七の追薦ふ宣の陀羅
尼も春ゐまべゆ向の水も凍解る四十九日の次の日ふ屋を毀て活却し
親の墓をゆ立ゑれども。世ふとちがゐゑ孤のまつも親族あふざれば
些ニの由縁を募つ。こふ一年かゐとよ半季繋ぬ舟と身をを。て且く
人ふゆるくるさこの客店ハ已ゐふが叙母の夫の家ふ伝へし。叙母
叙母夫もるくなりて今ハ代人の世とゐれども。舊縁あれべとゐ来て。

下女とし使ま伝へゐ。曩ゐハ駅を養へとそ。卧房の裏ふ送ーのひ。
二猶の賜ハ世よ富む人の千金ふ。すて今ハ衣を伝へゐ。恩を受て恩を
まゐ報べ狗自物とそ世ふいふ今骨よ逼るゐん身が厄難ゐゐくゐ
猜ーゐ。ものくもてらくて虎口を脱ー進ふ次べ。ころ易くゐひもく
といとゆひくくゐ意てもゐ形ゐ死身の憂苦ふいとで涙ハ禁ゐんで。
善意ハ信ある。言葉の事をゐけて来る。人の歎きも痛ーくゐ苦ー
さも自地よ物くゐうんとふゐ打行縁のくゐ楚然と。人の来る音ーくゐ
まゐべ。さそハ彼癖者ゐ手清ー果ゐうとゐくべ稽ーゐ。陽腥ゐる
程よ。お六ゐ。ぞつと起て。庖漏のゆゐ器ゐゐゐ。ようゐん善ゐ
旅宿ゐふ用意ー。風ひきたゐべと傷りて。一トゐびも湯ふ入ゐ
いくども絶て睡ゐべ。金ゐべ鞠ふ苞ゐゐ。財布と楚と旺ま

その後くとをあらせーうぶ。辭者もその意をきうて。法と除せうとて
勧めぶ。まろ法ふ貴者へ偶お六ぶ助を引そいと強ーくうるぶ。
いまぶ辞ふ吾ぶ。そのうる衆様ー合さぶ。このまふあんみ。秋元道
脱ぶ。ぶけん霧ふ相潭ふよりもぶ。ひとりまとを薬ぶとう。辭者
いりぶ。まろぶ。貧浴衣の袖をりて。耳を拭つめぶ。まとぶ。
ぶふ。ぶう。ぶまり。目今浴せぶへ。お六ふ。ふる衆。昔ぶ。財布を取ふ
まぶ。ふる隨湯ふ入ぶ。やとぶ。ひーぶ。ぶんめーぶ。身を起ー。家の人出
ませー。欲ぶ。ぶまへ四五日湯ふ入ぶ。疲労を補ふよりもあぶ。風邪もあぶ
おこさり取。浴ぶ。ぶう。ぶふり。といひつ秋ぶん。揚りぶ。ぶ。
辭者ぶ。てうち点沢。ぶへ一服ぶう。ぶ。ぶ。風爐の加減もうれ程ぶり。
垢ぶ。ぶ流ぶ。ぶまう。湯ぶ。ぬ。間ふ卧ーぶ。ぶ。ぶ。

宿の女の子ぶ。遽げふ。夕餐の膳をりてぶえう。貴者へ。ぶまーをんて。
家のへぶうぶのへ。吾倘へぶづ湯ふ入りて。と緑沢の障子ぶ。開き。浴室ろ
ぶへとぶ。ぶふ。お六ぶ。孫てぶう。引ぶ。掛燈蓋の下ふ立在。貴者を
俟てをう。引ぶぶうけまと。ぶうる衆。ぶうれぶへと。拭ぶす。浴せんと
宣ひー。ぶん。身ぶ。声を吹ーうぶ。急ぶ。夕餐をぶあう。ぶへ。彼をぶふ
拗うけて。飯をたうぶ。果ぶ。ぶ。ぶ立せぶとぶあ。ぶう。ぶふ。ぶあぶ。
ぶへと。密語ぶ。貴者へ。頻ふ。頻智を感佩ーうる。意ぶんぶ。摘ぶいうん。某
嫌ぶ。ぶよ。年を経ぶ。ぶへうる。既ふ。百五十金を獲ぶう。ぶうぶ
此度。ぶまを。家。畏ふ。舊里へ立ぶう。家を。ぶーぶ。亡親の。志を果さんと
ぶふ。ぶす。善。ぶ。麿ふ。あひー。縁故ぶ。個様ぶへと。寂寞の里。尽ぶ。
松蔭ぶて。両個の悪棍ぶ。刼ぶれーぶう。彼辭者ぶ。殺ぶて。己ぶを。ぶ。ぶ。伴侶ぶ

るり。道ばたのる死物ぐろ。彼が進止を窺ふよりこれ仰る悪棍
まで。かく生ぜぬ貴様なるこゝ且よ鞍の金ある様なんぢめとりよりこれば
なるべ。おろう故郷へ四里ふ是ふ。今宵一宿墓なく。あさーあるば
翌是夏彼よ跟ふるとも何ふのあるぞ。偏よ蔭を仰くのみと絶ふす
るく憑めば肩を顰めさりひあふこそ危くも危ふけまどさぐて
旅路の小賊が物ある人ふ跟さるべ。きく由断を窺ふりのるりされ
ゆるよ日をかさ称て共よゆくとも。薪かいーだく拐るとも。後乃崇を
おそるくふ。隙を獲ざれば下流下さぐど。その跟ふるく人も又道ばたら由
断せど。或い舊里近くるり。或ら都縣ふんどいと熱鬧ふる地よ入まば。
市の人ぶら美たを憑こそ。ふいどころ弛む折戦い忽ち彼を獲く。
輙く物を奪ひ去るとぞ。牛打童が夜話ふも。常ふ聞くふ伝ふる。

かく且ば今宵殃危を拐且ふりふ。翌ふ去ふ危ふ。
さいあがさぐや。と須喩せば言ふ有理とぞ。暫りて頷を頻し
嘆息ー。ふるいふる計りてこの殃危を拐ぐふ。と問へば六ハ
耳の根ふ脣をさーはて。彼ぐ欲ふるりのハ金ふ。金をば己ふ
領ふく。ふるりふ。こふ坐さんふふ危ー。子二ッの比ふ。厠へ登
かりちーて。緑状をうち殘ふ。竊ふ背門へ出ふ。前面ふ言ふ松
山ふ。この山ハ関の藤川へ出る捷径ふ伝ふ。ふるれども夜とふ。
走ふるんハ又危ー。山のあるぐ。十町ばかりにて。たゞふふりふる
叢の中ふ山神廟あるべ。其処よ躲ふて天を昭ー。他辯者ふ言ふ
さぐて。稼ぐふ二夫川へ渉りふる。獲ふ元銭を失ふど。ふんぬ
ふるべ。といと実ふ。ふ説示せば言ふ言ふて感弱ふ怪ぐ。

お六が人となりの妻籠あてよくもろうの狐も疑つべき肚あり。
財布を繹て。そがおろふ金を遣与せば。お六を左右のもの受て。懐ふ
楚と挾め。且くうち案じつ。ひとよ揮しる櫛をぬいとり。鞍の金銀
領ぐら。燈拠わらでい便ゐ所ゐるり。人も忘まじやをもとん。
お是い是五年前よもん牙が拾ふてゐつり。母の像見の櫛よ行り。
人ゐもあ是いが為ゐ。牙あゐるうえぬ拘ゐれば。是を燈拠て
進ふべし。玳瑁の班い五ッ付り。歯い三ッ缺て付るゐれば。紛ま。ある
だうも彼ぬ。ねしよやもん牙が来ゐせるとも。この櫛ゐくてこの金を。
輙くい遣与ぐ。又この櫛を齋間ゐつ。他しんが疑ふとも。金を
返ゐ進ふ次べ。ゐく堅固ゐる燈拠よ行是べ。紛失ひるふゐ。といひつ
櫛をさし出せば。是者ゐ是死受納めて。感涙堅よ拭ひあ。ど親ふ

孝あるのこるゐでいと有ゐ。才女ゐ拉ぐで論を敎くべき。とつふを
お六ゐ吹も果ど。湯ふ入ゐ。と見ふいいせ。裳を裹足を翹背門の
ゐ。ゐ牛ゐ。善者ハ遠く。衣脱捨て浴ふ。舊の坐敷ふ来てゐんまべ。
彼癖者ハ箸をおさめて。湯を吹冷ふ飲てをり。かれがお六といひつ
る紙。竊聞をるふ逞あ。ど。とろ。がんろふこころおちゆて。才女の桟
変ふ感服ふ。扨数をたうべ。且く四表八表の物かゐ。して
卧ゐう。時ゐや二更の比ゐ是ど。お六ゐ出居のゐふ。孤燈ふ
對ひ苧を績ぎをゐ。ゐく咳ゐて。ゐまぐ睡ゐぐ。ある衆示せば。者ハ
てゐづゐて。小夜の深ゐを俟ゐ。伴侶ゐる癖者ハ熟睡ゐて。鼾の
声いとゐく。お六も卧房ゐや入けん。咳ゐゆゐんどゐゐて。寂莫とゐ
さみゐ。三更の鐘吹ゐ是ゐ者ハ。竊ふ牙を起ゐて。則のゐ

入るに。雨戸を半開てあり。猶て庭へあがりて。背門のかなへ
繞り。樹間を潜り邑を踰。第面の山へ攀登るに。十九日の月いと
あかけれど。松ありれば樹下闇に。もくさに紛て入えず。株に跌きて
足を傷り。枝に携りて行ゆを痛し。難苦いへども。なほ背なる物の
あて殺しさに要時も憩ず喘く。尾上を越て登りけり。さる程に癖者の
甲夜なり鼾の声のきこえて陽睡してありしが目今善者が厠へ
ゆくを待て。そこに打こと。ひけん遣りて霸に起出ぬるの
彼が物なる一袱に推包て。背に楚と負ひ脱夾の靴食
湿して厠のかたへ。もうんとなる。善者が出るとより追ることや
とて幅二尺餘の行縁なる。雨戸の横へ推張して杖を横さまに
ゆが物あいとうるがるる。癖者なるとも。こは二とさらばうれ

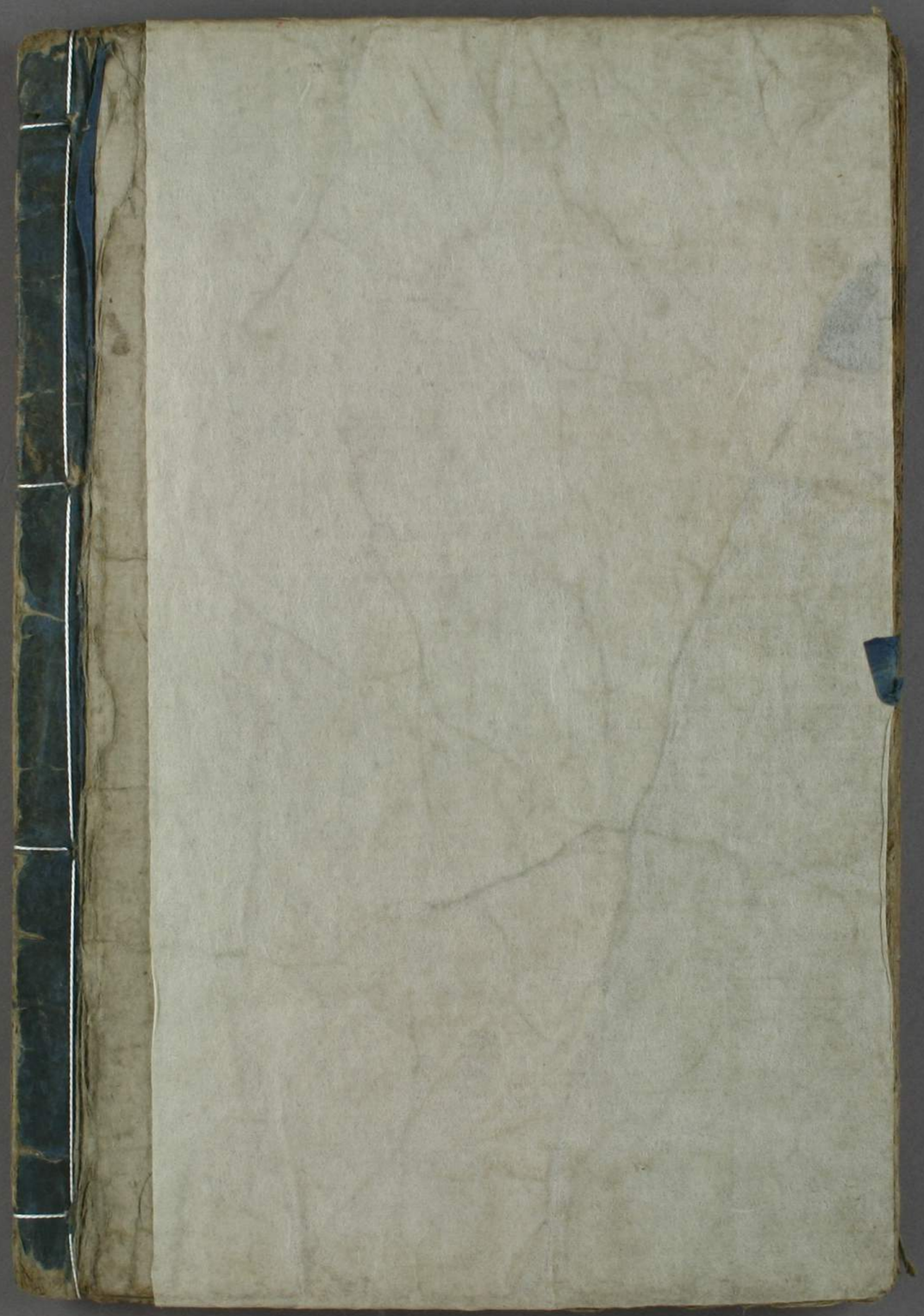
あ
足をとくいまして。俯よ輾びつ。行縁を衝拔る。そのあとびくく
ゆえーくべ。おいかさん。主人もこれに驚て学んで。忙しく掲燭して
来てさまを入るに。一個の旅客倒れてあり。その癖。紛くに出ども。
まづ引起して。卧房のかたへ扶入れて。絆の麻を解るとが。癖者は
迷惑して。今宵のるに紙きんと。ぬくぬ。伴侶のをとこを。ぬく
とそうたまと陳ずるもとろうるうて。主人も安ずるおいて。伴侶
なる旅客を尼さるふ。何の外へうめひらん。殺て新ぶ。えんざとい
癖者大さふ後悔し。這奴夜ふ紛れて逃ようとも。何地をぬく
いで追ひ苗んと。小膝を突て立んとする紙推をえて。主人も儀と頭を
更め。天にも真夜中ふゆふ。下女ふもきくせぞ。ぴそ安ふ物を
負ひ。背門のかたへ出んとしの。為体こそこそ行ふ。既ふ往方をぬ

るゝ。あん牙が伴侶ハ何地の人ぞ。こゝよあゝ孫びを非よ及びぞ。あん牙ハ
且く留りて天を眺ゝて出るゝ。こハ私ハ留るふあゝ沢。里の法よゆゝといつれて
頻る沢を搔き。黄蘗を嘗る瘠よひとゝく。腹たゝさを苦ぐゝく。
阿容そゝて天を眺ゝねゝての主人ゝ。松山の與惣と呼まて物ゝ熟ゝる
老人るんびゝづゝら坐資の出ハ沢ちゝて。終よ睡ふ沢。烏の恵を
ゝゝる比。おゝおをゝて。家具調度ゝゝど沢展見さゝるふ失ゝとゝゝゝ
るけまゝ。このゝゝゝ仔細ゝゝとて。彼癖者を放遣ゝゝとゝて。両戸閉ゝゝち
なゝどゝゝ。ニゝびニゝび癖者をつゝぐゝとゝんゝく嘆息ゝ。左の背ゝるゝふゝゝの
黒子ハ童形ゝ怨ゝり。汝ゝゝ。ゝゝつゝ赤坂ふゝゝと沢鬢の金を盗ゝゝゝ
逐電せ。丁児鶏太郎ふゝゝゝと同ゝて。ゝゝゝ沢を搔ゝゝ入ゝゝく。
主人をゝゝく大ゝふ驚ゝ。牙を搖ゝて逃ゝとゝるを与惣ゝんゝゝ睡ゝゝ。

横さまふり倒し。項髪細くて藤下ふ推伏。眼を瞪ふ」声をふり立て
畜生ふぜも劣る奴を道理のていひ懲ふ。ぞ盃の辨ふ仰えれども。
孤ひがあるして熱腸を冷ん。汝が七八才の比ありけん。親のなれのなんば
とて。叔父なる人が泣ぬだろふ。ゐて来て憑めば痛〳〵。めのふ立べき
年才なるふ孫ど。年季十年と定つ。そぶまくふ留めーよう。人を使い
使るくと喩の節の竹箒。門掃ともよくいる掃ど。刺衣施布
子も衣施紫なる。出るんば失足て泥塗ま入きば袖りて鼻を拭く。
剥毎夜の遺溺。襁褓ふ劣る貧蒲團。貧子の下まぞうち拂ー。
席薦を棄ーいくそーび。虱拾ふて又被る。繻半の裏の湿瘡
の膿。或ま凍瘃。瘃ふぶま。雀目の某二日灸。親ふひとー死養育の
主の恩をば去ふ。兎の天窓ぐぞちふ叱りつ。毎臂ふ習せ」ひ習墨と

のふ。曲るころのまぶそーて。三才児の魂百の歳。竊む癖
とそまりぞるふ。賒銭視の金掻攫ひて。逐電せーば忘まへ。汝が
十二のころのり死。貧さ叔父ふ債を負ー。逃ま野とるまと。客と。
牙ハりさぐりて。舊里近死。舊主の家ともふぞーて。こてふ宿りて
積悪の責ま皇天赦ーあへぞ。ぞれい世よ幸るくて。五歳年前ふ
妻を喪ひ。活業もとふよ仙ぞ。ぞの野上る客店ふ。松山某甲と
呼まー人夫婦。りともふ牙まりて。嗣ぞぐさ子もるけまぞ。
親族鄰人相謀りて。家を售と。吾倚ぞるうちまを
買ー。赤阪ようこの地ふ移住ー。舊ふ因て客店の松ふと呼まぞ。
三年の秋を送まども。倘児よ一夕も。宿せーるふ炎てみー。暴ー
逃ーる一個のぞとこへ。亦ま汝が支黨欲。明白ふこまをりー。

いやどや。と罵りて突倒せば。あざとく笑ひて詐り
渡覚えて。御ものゝ。大金齎る独行。よ紀ぞるなりと。遠跟て。密密の
里で恩を被せ。伴侶よるりて。三四日。這奴が由断を窺へば。そや
暁得まじく。便を獲ど。今胥なる。朝ごとふと。月筭用を
奈しーて。ものをば逃しーく。奪の去まする。幼稚とゝの小盗まで。長ちふ
祝つけらまで。かくやうでふ間がろうけまで。出るなりて。物ふせん十年
就分の給限で。四五年。扱侵まで。六七両の仂金。やりて逃られがて。
さのをいつく科あんあど。脾弱りのの二度も三度も。ゝりるやうで年
たけて。面忘ませーりの紙。祝方が。ふ物さく。去者揚て叩り
ありふる。壓て。蚩が出るりのぞ。おそ移しやく。ゝりるば。嗤やうさんと
塵撞拂て。身を起せば。与撫ゝ。怒よ堪ぞ。縁教のりゝりる。

杖を取て。殺んとするを。お六ゝ。ものそ推遮め。腹ゝちりふ。ふ理なれど。
懲しーく。数る。丐児よ。棒。去ばそ。まく去しーり。物ゝられ。行べ。と
賞るを。鶏太郎。ふ。曲ふて。出やく。されば。已。ゝ
聚会ふ。ま。を。ふり。ゝ。ものる。下女。ふ。ゝれて。古紙。巻。阿容ゝと
ゝて。同送ふ。ゝ。ゝ。善ゝ。ゝ。辛ゝも。盗難。を。脱ふ。ゝ。
ふ。ふ。蘂。登て。ゝの。夜。を。ゝ。る。紙。ゝ。ゝ。畢。竟。ゝ。ゝ。松。ふ。越る
とゝ。又。ゝ。ゝ。話。ゝ。ゝ。ゝ。次。の。巻。ふ。解。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。

青砥藤綱模稜案後集巻之二終